

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 116 号

平成23年12月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

<http://encounter.agape.gr.jp/>

「ミス・ローラ・J・モーク その信仰と生涯」より (7)

モーク先生の片影

藤田純一

1951年10月初めの日曜日、大学生だったわたしは初めて白山の坂

をとぼとぼのぼってモーク先生のバイブル・クラスに出席した。この日はちょうど使徒行伝24章、ローマ総督ペリクスがパウロの正義と審判に関する堂々たる弁舌に驚き不安を感じた事件の講義だった。ある教授が語った言葉“Mathematics is like God, because no mistake in everybody.”(数学は、神のようだ。なぜならすべての人にとって誤るところはないから。)を引用して、信仰こそすべてであり、信仰はすべてを変化させることができると説かれた。モーク先生の微笑をたたえた温顔と不動の信念に満ちた講義に私はペリクスのように驚かされたのだった。

1年ほどたった頃1枚の葉書が先生から届いた。“I am so glad you can continue to study the Bible in the English Bible Class. Now it is cooler, so we can study better and with more ease. God's word is the most important of all, so we must never give up that book.”(あなたが英語のバイブル・クラスで、聖書の勉強を続けることが

出来て大変喜んでいます。今は涼しくなりましたから、よりよくそしてより容易に勉強することが出来ます。神の言葉は、すべてのものの中で最も大切なものです。そうですから聖書を決してあきらめてはいけません。)

その後間もなく先生はたくさんの人たちに惜しまれ感謝されつつ帰国された。1957年のクリスマスに先生からカードをいただいた。

“Your letter telling of your Baptism and conversion brought joy to my heart as well as to the angels in Heaven. Jhon15:7. May you in turn lead many to Christ by your witness and testimony. My love and prayers.” (洗礼を受けたことと回心を知らせるあなたの手紙は、天国の天使たちへと同じように私の心に喜びをもたらしました。ヨハネによる福音書 15 章 7 節 (あなたがたがわたしにつながっており、私の言葉があなたがたにとどまっているならば、なんでも望むものを求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう。)。今度はあなたが証人と証言者となることによって、多くの人をキリストに導かれますように。愛と祈りを持って。)

もう 2 度と先生に地上でお目にかかることはできない。しかし生ある限り先生の面影を私の心の中から消し去ることはできないだろう。今、先生の筆跡を眺めながら、何という深い信仰と大きな愛に満ちた生涯を送られた方だろうかと思う。そして短期間であったが、モーク先生のバイブル・クラスに出席できた幸を限りなく感謝している。

(理博・東京大学原子核研究所助教授)

“Beside the still waters” (憩いの水ぎわ)

吉川時哉

いつもにこやかに話しかけて下さるモーク先生、憂いも悲しみも共に分かって下さるモーク先生、憂いも悲しみもともに分かって下さるモーク先生、霊の母として敬愛おくあたわざるモーク先生、先生が天に召されてはや半年、しかし月と共に日と共に呼べばこたえる。私の身近に祈っている、先生は死なない生きておられるという実感はいよいよ強い。天国とはそのようなものだろうか。

およそ生を人間に受けることはかたく、しかも露の命といわるる人生において、先生のごとき人格に遭遇できたことは文字どおり、誠にありがたいことであり、私の今日あるも先生の信仰の遺産の賜物と称して過言でない。ここにその遺産の一、二を記してお俣びしたい。

先生が、戦時中、収容所で言語に絶する試練に耐えられたことは周知である。なかんずく、爆撃下にあつて防空壕にはいることを肯んぜず、壕外にひざまずいて「自国の爆弾はわが頭上に炸裂せよ、無辜の日本人を傷つけることなかれ」と祈られたことは、戦い終わってこれを知った私の魂を根底よりゆさぶった。全生涯中これより感銘深きものはない。

そして戦後はじめてお目にかかったおり、収容所のご体験についておたずねしたら、苦しいこと、いやなこと、怨みがましいことにはいっさいふれず、いつものごとくにこやかなお顔をして答えられたお言葉がこれである。

It was “Beside the still waters.” それは「憩いの水ぎわ(詩篇 23・2)」でした。

いったい人間が焦土に直面して平然、しかも他人の身の上に思いをはせるといふことが可能なのだろうか。戦時の苦しい経験を身をもって経験した者には、それが至難の業であることを告白するに吝

かではない。ただ信仰者のふしぎというよりほかない。ではどうして可能なのだろうか。

詩篇 23 編によれば、「たといわれ死のかげの谷を歩むとも禍害をおそれじ」、なぜなら、「なんじ、我と共に在せばなり」である。すなわち信とは、神が我と共にいますということのいいである。神共に在せばこそ、死のかげの谷も、爆撃下の焦土も、「憩いの水ぎわ」となるのである。モーク先生とはまさにかくのごときお方であった。

私は 17 年間闘病生活の後、奇しくも社会復帰の機会に恵まれた者である。その間、先生が私に寄せられたご温情は限りないが、その一つに病床の慰めにとてよくご本を送ってくださった。晩年シカゴからくださったお手紙に次のごとくあった。

「あなたのために良い本をあちこちの本屋を探したが、聖書以上のよい本は見当たらない、いや聖書以外の本はくだらないようです。だからこれからは本は送らないことにします。聖書をよく読んでください。」と。

聖書を唯一のよりどころとし、神と共に歩むというこれこそ、焦土をも「憩いの水ぎわ、Beside the still waters」と化する信仰の秘訣である。私は今浦島のごとく、さまざまの現実に逢着して、苦悩するにつけ、数多い先生の遺産の中、以上の 2 点がいつも私を励ましてくれる。

“Beside the still waters”

先生は米国人であったから、英語でいわれたそのお言葉は、今なお私の耳朶に深く残っている。モーク先生のごとく、いっさいの苦悩を超えて、人生をかく観じ、かつ体験したいと願うや切である。

(吉川工業株式会社社長)

モーク先生を偲ぶ

渡辺滉

たしか昭和 23 年のことだったと思う。当時、本所緑星教会は戦災で広野牧師を失ったため正式の牧師がおらず、小西芳之助先生が主管者として牧会に当っておられた。小西先生は広野牧師と一高時代からの親友であり、モーク先生のマンデー・ミーティングの古いメンバーでもあった。そんな関係もあってか、戦後安田信託を辞し、緑星教会に身を投じられたようである。当時の小西先生は、未だ牧師としての資格をもっておられず、信仰的には学生時代に受けられた内村鑑三先生の影響を大きく受けており、しかも生い立ちの面から浄土真宗の理解もかなり深い、といった幅広い信仰をもっておられた。それだけに緑星教会のもつ伝統的な考え方、牧会の方法など、いろいろな面で摩擦が起こり、ついには小西先生排斥の動きが表面化した。

当時の僕は、未だ受洗しておらず正会員ではなかったから、事の真相について十分知らされていなかったし、この件についての議決権もなかった。だが、いいオヤジだった小西先生が追い出されることには、本能的に抵抗を感じ、学生時代の血気も手伝って教会の役員に片っ端からかみつき回り、あげくの果てに、モーク先生にも文句をつけに行ったのである。

その時、モーク先生は、ぼくの興奮し切った抗議に対して、こういわれた。「皆さんが祈りをもって、このことに当るかぎり、すべてはあい働いて益となるのです。たとえ、小西先生が出て行かれることになっても、きっと新しい土地に福音の種が播かれ、神様の栄光が顕わされることになりましょう。あなたも、そうなるように私といっしょに祈って下さい」。

僕は拍子抜けがして、シヨンボリ帰途についた。モーク先生の卓見はみごとに当たった。その後、小西先生は高円寺東教会をつくり、そこで新しい種を播き収穫に当っておられるのである。

(三和銀行行員)

三つの思い出

ルツ・エルマー

私が始めて 1949 年 6 月に、ローラー・モーク先生にお会いするまで、先生のお名前だけを伺っておりました。勿論私たちは 3 年間東京で一緒に働いておりましたし、お会いする機会もありましたが、少ない個人的接触を通してというよりも、むしろ先生の御名声を通じてよく存じあげていたように思います。先生はいつも愛すべきお人柄として私の記憶の中に残っております…。

ある夏、軽井沢に先生をお訪ねしました。昼食の後先生は私を連れて、サンセット・パス(碓氷峠)に着くまで、木陰の道を少し登って参りました。そこには木々の間に深く入りこんだ閑静なちょっとした場所がありました。先生はこの場所を礼拝の場と呼んでおられました。「毎朝早くここにきて聖書を読み祈ることが好きです」といわれました。実に自然に又真剣に先生は霊的な事柄についてお話しになりました。祈りと聖書を読むことが毎日の日課でしたし、この中にこそ先生の強く美しいクリスチャン・ライフがあったのです。

また私はお話しをなさるあのすばらしい御様子を憶えております。先生は私たちを全く魔法にかけるかのようにとらえ話されます。戦時中の経験、祈りに対する答え、神の現代の奇跡、友人のいろいろな親切、これらが皆、否それ以上の多くのものが、モーク先生の忘れることの出来ない話の“種”だったのです。

私が先生を記憶しております第 3 のことは、先生のいわゆる「オールド・ボーイ」達に対する愛であります。確かに先生はすべての人を愛されました。しかし先生のお心の中には、「オールド・ボーイ」達が特別な地位を占めておりました。そして今でも天にあって恵みを受けておられる時、先生が若い時にキリストに導いたこれらの人々がかって教えたように、今も主に忠実に仕えていることをきっと喜んでおられることと思います。わたしはミス・モーク先生の御生涯に接しえたことに感謝しております。先生を存じあげた

ことによってそれだけ一層私は豊かになったように思います。

同じ年齢の彼女

フランシス・メーヤー

わたしが、ミス・モークを思い出す時に、一番強く印象にある言葉は、「忠実」です。家族 お母さん、兄弟、姉妹、姪、甥に忠実でした。わたしはそれらの方々にお目にかかったことはありませんでしたけれども、彼女はその人たちについて何度も愛情をこめて語ってくれましたので、直接知っているような感じを受けました。ミス・モークはその友に対し、それらの人に対し、同労者に対し、その仕事に対し、また主に対して忠実でありました。ミス・バーンファインドどんなに彼女を信頼し、頼りにしていたかを、はっきり思い出します。

ミス・モークは丈は高くありませんでしたが、大きな心を持っていました。わたしどもみんなが知っておりますように、彼女は日本と日本人を愛していました。彼女は日本人のためならば、喜んで生命を捧げたであります。そしてそのことを戦争が起こった時に、彼女は身をもって証明いたしました。

彼女は食料が乏しく、生活が困難な戦時中に、日本に留まることを決意しました。そうすることによって、常に慰めと助けとを与えることを願ったからでした。

わたしたちがみんなそう言う意見だった訳ではありません。なぜなら、ある者はアメリカに帰って、アメリカの人達を教えることによって、一層役立つことができると感じたからであり、すべての日本人が残酷な訳ではなく、必ずしも全部の人たちが戦争に賛成しているのでもないということを感じていたからです。わたしたちが日本にいなければ、それだけ日本人には余計食料があるし、わたしたちのことで心配をかけなくて済むだろうと考えた人たちもいました。わたしは今、この両方の意見はともに必要であったのだと確信しております。と申しますのは、戦争が終わりましたとき、ミス・モークは、日本にいて、破壊されたものを再建する、事業にとりかかりました。私どもが日本に帰って参りました時には、既に小石川教会

は高円寺の石館先生のお宅で集会を始めておりましたし神学校も目白で始まっておりました。この間アメリカに帰っておりました私も、アメリカの人々に、日本の基督者並びに同労者のかたがたは、信ずるに足る人々であること、そしてまた、日本の国民は指導者たちによってあやまった方向に導かれていったものであることを説いていました。これもまた必要なことでありした。

収容所に御一緒におりました間、彼女はわたしどもにとりましては、「力の柱」でありました。そしていつも日毎の礼拝の司会が、彼女の番になるのをどんなに待ちわびていたことでしょう。彼女はいつでもすばらしい助けとなる聖書の話をして下さいました。

私たちの部屋で、家庭礼拝として始められたこの日毎の礼拝は、礼拝堂での合同礼拝となり、最大の喜びでした。このことに対しては当時の収容所長であり、わたしどももこの大きな特権を許して下さいました小川氏に対して、どれほど感謝しても、しきれるものではありません。

ミス・モークは、聖書をすばらしくよく教えました。このことは、彼女のバイブル・クラスに来るようになって基督者となった人々の生活を見ればわかることです。わたしは、それは彼女のゆるぎない信仰によるものであると確信致します。1961年にこのケンジントンに初めてミス・モークが訪ねてくださったときのことを、今もはっきり思い出します。わたしたちは庭いじりをするのが好きでしたから、芝生に腰を下ろして草むしりを致しました。

その間、幾時間も、日本にいるわたしたちのお友達の話をして致しました。ミス・モークが、彼女の日本のボーイズがいろいろの職業で、どんなに忠実に神の証人となっているかということをお話した時、何と彼らを誇りにしていたことでしょう。何人が牧師になり、教師になり、科学者になり、実業家、新聞記者になっているかを話してくれました。そして又東京聖經女学院を出て、今や教会に家庭に忠実な証人となっている婦人たちについても誇りをもって話しをしていました。その時わたくしたちは、神様が、わたくしたちに、日本で

奉仕する特権を、お与え下さったことにどんなに感謝したことでしょう。

今やミス・モークは、天においてその報いを豊かに受けておられると信じます。そして彼女の一生が及ぼした影響はいつまでも続いて行くと信じます。と申しますのは、彼女を知り、愛したわたくしどもは、聖別された生活を送り、日本だけでなく、世界中に神の国を打ちたてるために、一所懸命になっているからであります。

(故メーヤ博士夫人)